

## 人間の尊厳を守るために

皆さんは、南アフリカ共和国という国を知っていますか？  
アフリカ大陸の最南端にある国です。

では、アパルトヘイト政策は知っていますか？

一九四〇年代後半に法制化され、以来、南アフリカ共和国で継続された人種差別政策のことです。白人と非白人（黒人やアジア系住民など）との関係を差別的に規定する政策でした。

アパルトヘイト政策の下では、住む地域も人種ごとに定められていて、選挙権が与えられているのは白人だけでした。また、例えば、白人鉱業労働者は黒人の二十一倍もの給料をもっているというように、生活の全てにおいて、人種による差別が行われていたのです。

当然のことながら、この政策については、しだいに国際社会から非難されるようになり、アパルトヘイト政策に反対する運動も激化していきました。

一九八九年、国の現状を変えることが必要だと考えていたフレデリック・デ・クラークが大統領に就任し、ようやくアパルトヘイト政策の撤廃に向けての改革が始まりました。一九九一年、人種差別政策の関連法が全廃され、一九九四年四月には、南アフリカ共和国史上初めて、黒人を含む全人種の参加による選挙が行われました。この選挙では、アパルトヘイト政策の撤廃を推進してきたアフリカ民族会議（ANC）が六十二パーセントの得票率で勝利



## 人間の尊厳を守るために

し、その結果、アパルトヘイト政策は完全に撤廃てつぱいされました。そして、ANCの議長が、黒人として初めて、南アフリカ共和国大統領に選出えんしゅされました。

ネルソン・ホリシャシャ・マンデラです。



マンデラは、若い頃こころから、自分の信じる道を進もうとする強い意志をもっていました。そして、全ての人間の尊厳を守るため、アパルトヘイト政策の撤廃てつぱいに向けて闘たたかい続けました。しかし、そんなマンデラは、一九六四年、国家反逆罪で終身刑しゅうしんけいを受け、ロベン島という孤島ことうの刑務所に収監しゅうかんされてしまいます。

幾度いくどか刑務所を移りながらの収監しゅうかんは、二十七年間にも及びました。その間に、結核けっかくになったり、石灰石採掘場せいかいせきさいくつじょうでの重労働により目を痛めたりしたこともありました。それでもマンデラは、強い意志で刑務所の中でも勉学を続け、一九八九年には南アフリカ大学の通信制課程を修了しゅうりょうして法学士号を取得しました。

この収監中、マンデラは看守からさまざまひどい仕打ちを受けたと言われています。それは、まさに、人間の意気をくじき、決心を打ち砕くだき、人間性を踏ふみにじるものでした。

しかし、マンデラはそれらの仕打ちにも絶対に負けませんでした。

「仲間とともにいれば、決心は強化される。わたしたちはたがいに支え合い、たがいに力を与あたえ合った。」

「(人間の)尊厳のために、そして、尊厳があればこそ、人間は生き延びていけるのだ。わたしは、どんな対価を支払しはらっても、どんな圧力を受けても、尊厳を手放す気はなかったから、それを奪うばい取ろうとする人間も組織も、目的を果たすことはできないだろう。」



それらの言葉のとおり、マンデラは、同じく収監しゅうかんされていた仲間たちと団結し、刑務所けいむしょという極めて厳しい環境かんきょうの中でも決して絶望することなく、自分の信念をさらに強固なものとしていったのです。

◆  
アバルトヘイト政策の撤廃てつぱいを望む声が日に日に高まっていく中、一九九〇年、ようやくマンデラは釈放しやくほうされました。翌年、ANCの議長となったマンデラは、人種の壁かべを越こえた全民族融和ゆうわのために力を尽くしました。そして、一九九三年には、その大きな功績が認められ、当時のデ・クラーク大統領とともに、ノーベル平和賞を受賞したのです。

一九九四年、マンデラの大統領就任が決まった時、白人の政府職員たちの中には、マンデラからの仕返しを恐れ、辞職する覚悟かくごをして荷物をまとめ始める者もいたと言われています。ところがマンデラは、全ての職員を集めて次のように述べました。

「辞めるのは自由だが、新しい南アフリカ共和国を作るために協力してほしい。あなたたちの協力が必要だ。」

また、マンデラは、自分の身を守ってくれるボディーガードも、黒人と白人の両方が所属する混成チームにしました。それは、全ての民族の融和ゆうわというマンデラの信念を示すものであった言われています。

「この国を変えたい」というマンデラの強い思いは、彼の大統領就任の演説にも表れています。

「今こそ傷をいやすときです。今こそ、私たちを分け隔へだててきた深淵しんえんに橋を架かける瞬間しゅんかんです。」





国造りのときが訪れたのです。」

◆ マンデラの九十五年の人生は、人種を超えて、全ての人々の幸せを願い、闘い続けた日々でした。人間の尊厳を守るために、どこまでも人間を信じて……。

「肌の色や、素性や、宗教を理由に人を憎むように生まれてきた人間はいない。憎むことは学んだのだ。」

そして、憎むことを学んだのだったら、愛することを教わることも可能なはずである。愛することは憎むことより、人間の心にとって自然なものだから。」

—— ネルソン・ホリシヤシャ・マンデラ

(篠塚 浩幸 作)

【参考資料】「自由への長い道」上・下

ネルソン・マンデラ著 東江一紀訳 NHK出版

「ネルソン・マンデラ 未来を変える言葉」

ネルソン・マンデラ著 長田雅子訳 明石書店

